

学 位 論 文 題 名

アリストテレスの生命論

－ 『デ・アニマ』における目的論と「現実態」の概念－

学位論文内容の要旨

論文の構成（目次）

序 論

第Ⅰ章 生命の一般的定義

第1節 探求対象としての「生命」

第2節 生命の定義をめぐる問題

A 質料形相論の適用の問題 / B 機能主義としての解釈の問題

第3節 「第一の現実態」あるいは「形相」という定義の意味

A 身体と生の活動と生命の関係――「第一の」現実態という規定

B 生命はどのようにして把握されているか

第4節 生命と身体の一性

A 「現実態において一つ」の意味 / B アリストテレスと機能主義

第Ⅱ章 感覚と思惟における能動性と受動性をめぐって

第1節 感覚と思惟の平行性と違い

第2節 感覚論の二つの問題

A 感覚活動の積極的意義 / B 感覚には能動性がないと言えるか

第3節 思惟における能動性と受動性の問題

A 可能態においてあることと受動態においてあることは同じか

B 能動性と受動性の関係――「実体において現実態」であるもの

第4節 現実態にあるものの受容的活動――感覚と思惟の平行性・再論

第Ⅲ章 生命と自然

第1節 最も基本的な生命能力の働き

第2節 栄養とは何か

A 栄養物の可能態と現実態の局面 / B 「栄養」と「実体」

第3節 生命と「自然」概念――現実態にあるものの能動的原理

結 論

註および参考文献

論文の内容

第一章は、アリストテレスが「プシューケー」を生きることの原理、すなわち「生命」として把握していることを主張する。すなわち、栄養摂取や成長といった植物の生の営みから、動物あるいは人間の運動、感覚、思惟などに至る、生の活動の原理が「プシューケー」であり、それは「心の働きをも含めた生命」とであると主張する。したがって、従来は「魂」と「生命」という訳語が支配的であった *psychē* と *zōē* は、むしろ「生命」と「生の活動」ととらえるべきであることを提唱する。

アリストテレスによる生命の二通りの定義については、質料形相論と「可能態」と「現実態」の議論を検討している。まず、生き物において「生命は形相であり、身体は質料である」とする質料形相論については、生命が外形と区別された意味での形相であることを指摘する。すなわち、生の活動の原理・原因である生命は、生き物の存在の原因として思考によって把握され、外形とは別の仕方では把握されけるとする。

また、生命を「第一の現実態」とする定義については、生の活動という我々の感覚に明らかな現実態を介して生命という（第一の）現実態が同定され定義されるという構造になっていることを指摘する。この定義の構造は、現代の機能主義の中心的特徴である「関係的定義（原因となる入力と行動的出力によって機能を定義する）」の構造と一致しており、アリストテレスの生命論に機能主義的特徴を認めうると結論する。すなわち、生命（形相）は身体（質料）から離れては存在しないという反デカルト二元論的な主張と、生命（形相）が身体（質料）に還元できない存在であるという非還元主義の主張が、現代の機能主義と共通する動機に基づいているとする。また、こうした「現実態」の概念は、働きを持つ事物にとっては現実に活動することが目的であるというアリストテレスの目的論を支える重要な概念である。

第二章は、感覚と思惟について、能動性と受動性、および可能態と現実態という二つの対の観点から検討している。アリストテレスは感覚と思惟を「何かの作用を受ける」（情報を受け取る）という点で平行的にとらえつつも、感覚の受動性と思惟の能動性を対照的に説明している。その事から、感覚と思惟それぞれについて問題が生じていることを指摘する。

まず、感覚については、感覚されるものから作用を受けることなしには生じないという意味で受動的であるとしても、感覚活動には積極的な意義が認められることを、アリストテレスが主張していると論ずる。『デ・アニマ』第Ⅱ巻第5章について、古来の解釈では、当該箇所のアリストテレスの論述の意図が正確に把握されていなかったが、可能態から現実態への転換には二つの観点、すなわち単純に形式的に扱う観点と、価値的な観点があることを指摘する。そして、感覚能力が現実に行使されること、すなわち感覚能力が可能態から現実態へと転換することを、アリストテレスは有意義なこととして認めているとする。つまり、可能態・現実態を用いた感覚説明が、単に感覚の仕組みを没価値的に説明するのではなく、価値的な観点からのコミットがあることを見逃してはならないと論ずる。そして、自身の持ち前・本性・形相が活かされることになる方向の現実化こそが善いという目的論的な主張をここに見る。また、感覚には単に受動性だけでなく、感覚対象を把握する上での志向的な能動性が認められ

ることを主張する。

さらに、思惟については、自身の力で思惟し始めることができるという意味での能動性と、対象を受容するという意味での受動性との関係を問題にしている。第Ⅲ巻第4、5章の知性論（思惟論）を分析すると、能動性と受動性という二側面が錯綜して論じられているが、我々がそのつど他者の力によらずに思惟を開始できるのは、可能態から現実態へと転換せしめる能動的な原理によってであって、不滅で神的と言われる、個人を超えた能動知性が、同時に、思惟能力を持つ可滅的な個人にも関与するのは、この点においてであると結論している。

第三章は、最も基本的な生命能力の働きである栄養摂取、成長、生殖を、やはり現実態・可能態の概念に基づき、能動と受動の作用として理解することを試みる。栄養摂取による同化は、生殖と同様に、現実態にある生き物が「比」（logos）に相当する能動的原理によって、「自身と同じようなもの」を生み出し実体を活かす働きであると説明する。自然と生命の相違については、後者のみが「比」を伴った能力である点にあると解する。我々が「自己」あるいは「自我」と呼ぶところの、心あるいは精神の高度な働きも、実は基本的には生命が持つ、「自身」を活かし維持する働きと連続しており、さらにそれが「自然」に起源を持っていると論じ、両者を連続的に把握することが、アリストテレスの目的論的自然観の主旨であると結論している。

学位論文審査の要旨

主査	教授	田中	亨英
副査	助教授	千葉	恵
副査	教授	安西	真
副査	助教授	砂田	徹

学位論文題名

アリストテレスの生命論

－『デ・アニマ』における目的論と「現実態」の概念－

本論文は、アリストテレスの『デ・アニマ』（すなわち『プシューケー論』）を主たる研究対象とし、これを「生命論」として理解しようとする試みである。アリストテレスのこの著作の主題である「プシューケー」は、従来普通には「soul」「靈魂」などと訳され、著作の題名は『On Soul』『靈魂論』と呼ばれてきた。この標題から、人は、死後の靈魂の存在か、あるいは神懸かり的な交霊術の話を思い浮かべるだろう。だがそれは誤解であり、その責任はこの著作の内容を理解しない訳語にある。最近の研究は、アリストテレスのここでの議論の主題が、むしろ現代の「心の哲学」の問題（心とは何か、心と身体の関係について、など）に近いものであることを指摘するようになってきている。三浦論文は、これをさらに一步進め、より正確には「生命論」と呼ばれるべきものであることを初めて明確に主張したものである。つまり、アリストテレスの『デ・アニマ』は、「感覚」と「思惟」の探求にとどまらず、それを含んだうえでさらに広く「生の活動」全体のみなもとである「生命」を把握理解する仕事であったことを明らかにした。審査委員会では、まず第一に、この点の独創性が認められた。

三浦論文は「生命」こそがアリストテレスの意図した主題であったことを、『デ・アニマ』のテキストに即して説得的に実証している（第Ⅰ章のアリストテレスによる先行哲学者批判、第Ⅲ章の栄養論）。三浦氏のこの発見は、現代の哲学に対して「生命論」という新しい視点を提供する点で、現代的な貢献となりうるものである。たとえば生命と身体の関係についての議論は、現代の心身関係論に寄与するところが多いと思われる。（本論文は、現代の機能主義の心身論とアリストテレスの生命論を比較して論じている。）さらに本論文は、『自然学』その他、『デ・アニマ』以外の著作にも視野を広げ、アリストテレスが「生命」を「自然」全体の目的論の中に位置づけていることを見出している。この視点は、生命論を中心にした新しい自然哲学の可

能性をも示唆する。

以上の点は本論文のパースペクティヴの広さを示すものであるが、それを支えているのが、アリストテレスのテキストについての三浦氏の精緻な読みである。その一例は『デ・アニマ』第Ⅱ巻第1、2章の「生命の定義」の解明（本論文第Ⅰ章第3、4節）であり、もう一例は『デ・アニマ』第Ⅱ巻第5章の感覚の受動性と能動性にかかわる論述の解明（本論文第Ⅱ章第2節）である。前者では三浦氏は、「生命」というそれ自体は目に見えない対象をとらえる、アリストテレス苦心の「挟み込み」の手法を的確に追跡している。後者は、論述の外見的錯綜のゆえにこれまで多くの研究者を悩ませてきたテキストであるが、三浦論文はここにアリストテレスのディアレクティックな論法を見て取り、これを解明することに見事に成功した。この論文では、細部についてのこのように周到で鋭い読みが、射程の広い哲学的洞察と一体になっている。

このほか審査委員会は、本論文が、『デ・アニマ』全体をアリストテレスの目的論的自然観の中に位置づけ、現実態と可能態における能動と受動に焦点を当てて、これまで解釈が分かれてきた諸論点に独自の読みを提出したこと、アリストテレス全集の本文に広く当り、かつギリシャ語古註をはじめ二千年に及ぶ数ヵ国語による研究を幅広く渉猟して、これを概ね公正適切に援用していること、アリストテレス研究の手法として、栄養、感覚、思惟などにかかわる生命論に、形相質料、現実態可能態などの形而上学的概念を適用し、生命論と形而上学との双方の理解を深めることに貢献していること、現代の心身論の潮流である機能主義に対してアリストテレスの側から新鮮な提言を試みていること、などを高く評価した。今後の課題として、アリストテレスの生命論に関しては、さらに人間の倫理的生をどう位置づけるかという問題が考えられること、ギリシャ人の「プシューケー」の観念については、さらに周到な歴史的研究が望まれること、現代の機能主義理論との対話は、さらに精緻な形に洗練する必要があること、などの注文が出されたが、本論文がそれ自体として十分な完成度に到達しているということについては全員の意見が一致した。

以上によって、本審査委員会は、本論文を博士学位論文としてふさわしい研究業績であると判定し、本論文の著者三浦洋氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。